

小山内薫の翻案劇論争

新劇（日本近代劇）の指導者小山内薫が、その自由劇場の新劇の発足以前に、劇評家諸先生を相手に翻案劇論争といふべきものを起したことは、從來知られていない。その発端は次のようである。

明治三十七年十一月、真砂座で小山内薫訳による「ロメオとジュリエット」が伊井蓉峰らによつて上演された。その劇評が各紙に出たが、小山内の翻案の仕方などについて批評した部分があつた。小山内がこれに反論して翻案劇論争が起つたのである。小山内の反論は三十七年十二月一日発行『歌舞伎』五六号に載つた「劇評家諸先生に申上候」である。署名は「ロメオ」劇の摘譯者とあるがこれぞ小山内である。小山内のこの論説は細かい論点に分かれていゝる上に、論争相手の新聞劇評もそれに対応する部分しか示してないので、通常とは異つて各論点ごとにまとめることとしたい。

真砂座座主の依頼によりてシエークスピアの碌々讀め

小櫃 万津男

ぬ小生が即座に摘譯口述致し候惡脚本に就き寛大なる
劇評家諸先生の御忠告を辱う致し候條ひそかに感佩
在候。然る處諸先生の御忠告に於て、小生の愚鈍不
學なる、了解致しがたき條々少なからず、

このような前書があつて、以下具体的に述べている。

先づ讀賣の白鳥先生に伺上候。先生は「第一この夢幻劇を明治の寫實劇とせしこと根本的過失にて」と仰せられ候へども小生には此一句解り兼ね候。

以上に『讀賣』の白鳥先生とあるのは正宗白鳥で、その劇評は三十七年十一月十二日付、同紙第九八五三号に載つた。標題は「真砂座評」、署名は「白鳥」である。

先づ白鳥相手の第一点から検討しよう。

この夢幻劇を明治の寫實劇としたのは、根本的過失であるといふ点はどう考えるべきであろうか。夢幻劇とされた「ロメオとジュリエット」は悲劇であつて内容もロメオとジュリエットの恋を描いたもので、夢幻劇といわれるよう

な夢幻的な要素はほとんどない。この作品を夢幻劇とするのはそぐわないと思う。

それから明治の写実劇としたのが根本的過失であるという点は、その後白鳥が

両伯爵家の相反目し、相互の家族従僕が常に仕込杖を携へて、白晝市内を横行し、剩へ街上血を流し敵を殺すなどのことあり得べきやうなし。

などと述べているので、少くともこの部分は写実的演技であつたことが判る。従つて明治の写実劇として不自然で相応しくないとの意味であることも判る。小山内はこれを解りかねるといふのであるが、よく読めば解る筈である。

もつとも小山内は

今度の芝居が果して明治の寫實劇と申すものにや、小生一向不案内に有之候。

と述べているので、明治の写実劇と勝手に銘名されたことに不快感を覚えたとも考えられる。それはともかく、その写実劇に理解を示さなかつたのは小山内のマイナスであり、夢幻劇と評したことは白鳥のマイナスであつて、第一点についての勝負は引分けである。

第二点は先に引用した「両伯爵家の相反目し」云々の白鳥の記述を小山内も引用し、

これは諸先生悉く御同意見と相見え、**●●●●●●**青青園先生も

●●●●先生も或は「無警察の野蠻國」と仰せられ、或は「白春曙先生も或は「無警察の野蠻國」と仰せられ、或は「白袴隊とかいふ悪書生の喧嘩めきて」と仰せられ候が、小生は戯曲脚本を以て詩なりと存じ居候故、詩として甚だしき不自然ならざる限りは御許し下されて宜しきかと存じ候。

ここで「青青園先生」といわれているのは伊原青々園で、その劇評は三十七年十一月十五、十六日付『都新聞』第六〇三七・三八号に二回連載された。標題は「眞砂座見物記」、署名は「青々園」である。

また「春曙先生」といわれているのは土肥春曙で、その劇評は三十七年十一月十五日付『中央新聞』第七〇七一号に載つた。標題は「眞砂座の沙翁劇」署名は「春生」である。

ここで「無警察の野蠻國」と評したのは春曙であり、「白袴隊」云々といつたのは青々園である。

この第二点はいかがであるうか。両家の争いの様が明治時代のこととしては不自然であると青々園も春曙もいう訳であるが、これに対して小山内は甚しく不自然でない限りは、許されてよいのではないかという。この辺は翻案劇の難しいところで、小山内は次のようにもいつている。

もとく英吉利と云ふ外國の昔の作者がまた其外國の伊太利を舞臺にして書き候ものをいとく微細なる點

ここの判定は諸先生の勝である。小山内は自ら珍句と称して、その翻訳の一部を明らかにしている。この珍句ある故に、また諸先生一致して直訳的としている点からも、小山内の負と判定せざるを得ない。

第五点は

小生の少々了解致し難きは諸先生の所謂「直譯」と云ふ意義に候。

諸先生の仰せられた言葉を案ずると、

諸先生の所謂「直譯」とは「逐次譯」と云ふ程の意には無之候や。

諸先生は一方に於いて

此脚本の逐次譯なるが故に今日の日本人が云ひさうもなき言葉となり、觀者の同情を削ぐと仰せられ候。然るに一方に於て此劇の明治式なるを罵られ、時代物にしたらば宜しからむにと仰せられ候。明治式にしてさへそぐはぬ西洋式の臺詞を、如何にして時代物の人物に云はしめむとし給ふや、伺度候。

時代物にするなら無論逐次訳などという愚なことはしないというのが、諸先生のお答えであろうが、

それなれば何もシエークスピアが如何の斯うのと騒ぐ必要無之かと存じ候。

戯曲は道具帳ではなく詩であるから、最も重んずべきは

台詞だと思ふ。

小生の譯の拙悪なるは惜きて、小生が小生の頭腦に深く感じ候沙翁の名句を逐次譯いたし候が爲め諸先生の御叱責を受け候事心得がたく候。

ここで「逐次譯なるが故に今日の日本人が云ひさうもなき言葉となり、」といつてゐるのは、春曙評に「最も耳障りなるは、臺詞の餘りに甚だしく直譯振なることにて、之が爲に多少は見らるべきかと思はれし場も、同情を惹かるべき人物も、メチャクとなり了りしことに御座候、」と述べているところに依つたのであらう。

また「時代物にしたらば宜しからむにと仰せられ候。」とあるのは、青々園評の一回目にある「時代物に翻案してこそ其の妙はあるべけれ、」に依つてゐる。

さてこの勝負は「明治式にしてさへそぐはぬ西洋式の臺詞を、如何にして時代物の人物に云はしめむとし給ふや」といふ小山内の言葉をどう評価するにかかっている。結論は小山内の勝である。明治の世話物としては不自然な部分もあつたことは、諸評にある通りである。しかしそれだからといって時代物に翻案しようとしたら、その難しさはそれ以上であらう。それにしても西洋劇を論ずるに、わが国の概念である時代物、世話物という用語を使わねばならなかつたのも時代相であらう。

小山内が自分の頭で深く感じたシェイクスピアを逐次訳したのを、諸先生に叱責されたのは「心得がたく候」というのは、当時の彼の心境を雄弁に物語っている。

第六点、

尚●白●鳥●先生●に●伺●ひ●た●き●は●、『●私●は●稻●妻●が●光●つ●た●や●う●に●愛●し●ま●す●』と●分●れ●際●に●云●ふ●べ●き●を●』と●仰●せ●ら●れ●て●候●へ●ど●も●か●ゝる●文●句●は●小●生●の●拙●譯●に●も●無●之●、●小●生●所●有●の●原●本●に●も●無●之●や●う●見●受●け●ら●れ●候●が●如●何●の●物●の●に●候●や●。●役●者●の●云●ひ●誤●り●を●其●儘●御●轉●載●な●さ●れ●候●や●う●の●事●あ●り●て●は●恐●れ●入●り●候●。『分●れ●際●は●云●ふ●べ●き●を』と●ある●も●何●の●事●や●ら●解●り●兼●ね●候●。●こ●れ●が●事●実●だ●と●す●る●と●「白●鳥●先生」●は●と●ん●だ●誤●り●を●犯●し●た●こ●と●に●な●る●。

第七点はやはり白鳥が相手である。

「薔薇の花は其名を變へても矢張薔薇だといふ名文句も、これを直譯して日本に移しては色も香もなくなりたり」と仰せられ候へども that which we call a rose, by another name would smell as smell と云ふが仰せの如き意味と相成候や了解致し難く候。

この原文を文字通り訳せば、「われわれがバラと呼ぶところのものは、他の名で呼んでも同じように香る」ということであつて、「坪内逍遙」訳でも

薔薇の花は、他の名で呼んでも、同じやうに善い香が

する。〔新修シェイクスピア全集〕第二五卷。「ロミオとジュリエット」昭和八年十月三十日、中央公論社刊〕とある。

これも白鳥先生は味噌を付けた。白鳥訳では "smell as smell" が訳されていない。それなのに「香もなくなりたり」と小山内を非難しているのは最大の皮肉である。

第八点は「青々園先生」が相手である。

先生は「往々原作の警句妙文を其まゝに譯して」と仰せられ候。また「翻案」と云ふ御言葉も相見え候。

この度の脚本は翻案というものではないと思う。原作の人名を日本の名に直したこと、原作の場面を省略したこと、台詞の大部分を省略したことであるが、小生の作つた台詞は三四のみ、他はことごとく原作の文を意識もしくは逐次訳しただけである。

以上によると人名を日本の名に直したといい、相当の手直しをしているようであるから、これはやはり翻案である。

青々園先生は「福島と中村の役が引立たざりしは翻案の具合にもよるならん」と仰せられたが、BenolioとTybaltの台詞は、

比較的原作の大部分を摘譯し得たりと信じ居り候、

翻案の具合にもよるであろう、というだけでは、

小生如き不才の悟り難き點も有之候間、何卒原作と御対照の上、微細に御教示願上候。

小山内のいい分はもつともである。

第九点は『萬朝報』の「鬼川先生」が相手である。

先生は「翻譯者の筆が幼稚と云ふよりは寧ろ舞臺の効果と云ふ事を知らないと見え」と仰せられ候。小生の筆の幼稚なる事は勿論にて汗顔の外無之候。舞臺の効果とは、ステイジ、エツフエクトの御意ならむが、成程これも小生一向無經驗にて恐縮の外無之候。然し此度のロメオ劇が小生のステイジ、エツフエクトと云ふものを知らぬが爲めに失敗したと仰せあるは聊か不審しき義に候。ステイジ、エツフエクトは多少臺詞の上にも有之べけれど多くは人物の動作、人物の出入、場面の變化等にあるなるべく、左すれば其三點に於て粗々原作に従ひし此度の芝居に於て、小生がステイジ、エツフエクトに經驗なきとありとは何等の關する處なきにては候はずや、此度の人物の出入、場面の變化等に御非難有之候なれば直ちに原作に就てなされたる方宜しかるべくと存じ候。原作精通の諸先生が斯る事を仰せられては修業中の小生等まごつく事一方ならず候。

これは小山内の完勝である。「ステイジ、エツフエクト」とは既に「ステイジ」とあるように舞台上の効果を用いる

であつて、小山内のいうところが正しい。翻譯者の筆が幼稚といわれ、「汗顔の外無之候」と一応恐縮して置いて、その後、に猛反撃に移るところなど小山内の喧嘩上手が眼に見えるようだ。

第十点は同じく鬼川先生が相手である。

「人の煽動に乗せられて沙翁を地下に泣かせるやうな罪を作つた」との御言葉に候。

人の煽動とか乗せられてなどと人聴きが悪いので再考を願う。

小生は別に煽動された覚えも無之、また誰も小生を煽動した覚えもなかるまじく、是等はすべて大沙翁が理想像に類するもの故、脚本ならば兎に角、新聞の劇評などへ御書きになりては折角の大詩材をあたらものに被成候事と竊かに涙をこぼし居候。「沙翁を地下に泣かせる」と仰せられ候へども、心宇宙を包む沙翁が極東の一書生の爲めに腹を立てると云ふのも餘り吝な話、それとも鬼川先生たしかに沙翁の涙を御覧なれば、何れ御懇意のお間柄と存じ候間小生に代りよしなに御詫願上候。

これも小山内の勝である。「人の煽動に乗せられて沙翁を地下に泣かせるやうな罪を作つた」という、いわばいいがかりに近い鬼川のいい分を軽くないなしている。そのユーモアも面白い。

第十一点は同じく鬼川が相手である。

「之を時代物として鑑武者として見せたなら」と仰せられ候がこれは先生あまりシエークスピアに通じ居らるゝが爲め、数多き脚本の事とて、かのヒストリカル、プレイスなど、御取違へなされ候にはあらずや。

これも小山内の勝である。先にも記したが、明治の世話物としては不自然な部分もあつたのは確かであるが、だからといって時代物に翻案するのは、それ以上に難事である。

以上が小山内と白鳥・青々園・春曙・鬼川の間に交された翻案劇論争の概要である。

ではこの論争全体を通じての意義を考えてみたい。

第一の意義は小山内薫という新しいタイプの指導者の俊英ぶりが見られるという点である。この論争の争点十一点の内、実に八点が小山内の勝であり、引分けが二点、諸先生の勝は僅か一点である。小山内の俊英ぶりを見ない訳には行かない。

第二の意義は翻案劇の難しさが表れている点である。いわゆる新劇が西洋の翻訳劇の移入から始まったのであるが、その前段階として西洋劇を日本のこととして作り変える翻案劇があつた。なにしろ西洋のものを日本のものとするのであるから、どうしても不自然な部分が出来てしまう。そ

れを乗り越えて、如何にして日本化するかという課題に、多くの関係者が苦心した訳である。その苦心の一端がこの論争を通じてよく表れていると思う。

第三の意義は劇評家の西洋劇に対する意識の低さが露呈している点である。その最たるものが西洋劇を論ずるのに我が国の理念である時代物、世話物というものを持ち出していることである。外国語の能力も白鳥に見られるように大したことはない。小山内がシエークスピアもロクに読んだことがないといっているが、これは彼等の外国語の能力への皮肉とも取れるのである。口述したという小山内の語学力は彼等をはるかに越えていたと思われる。そこには後のいわゆる新劇の指導者となる小山内を予告しているようにも見られるのである。

引用文は原則として原文のままであるが、そこで使われている旧漢字が新漢字と近似したものは、新漢字を代用した場合がある。